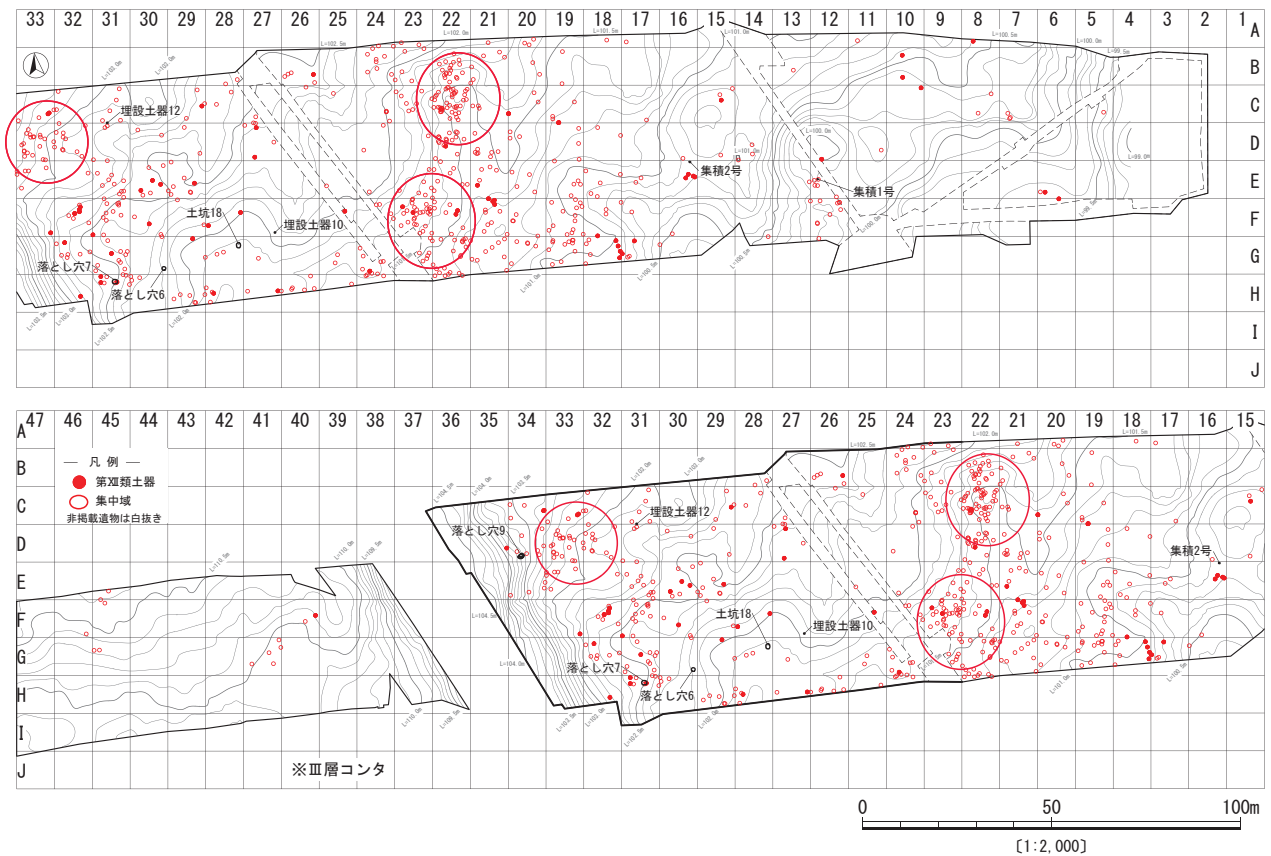


第 434 図 第VI～X類（西平式系不明土器）分布図及び遺構配置図



第 435 図 第XII類（中岳Ⅱ式土器）分布図及び遺構配置図

第 435 図は第Ⅻ類土器の分布図、遺構配置図である。西平式系有文土器（第Ⅵ～第Ⅸ類）が分布する場所と第Ⅻ類土器が集中する場所がほぼ同一である。

参考文献

前迫亮一 1992 「異系統土器文化の一接点」『南九州縄文通信』 No 6 南九州縄文研究会
 水ノ江和同 2001 『九州地方北部における縄文時代集落の諸様相』, 第 1 回研究集会基礎資料集「列島における縄文時代集落の諸様相」 縄文時代文化研究会
 山本暉久 2001 『環状集落の形成』, 第 1 回研究集会発表要旨「縄文時代集落研究の現段階」 縄文時代文化研究会
 前迫亮一 2002 「南の磨消縄文土器」『四国とその周辺の考古学』 犬飼徹夫先生古稀記念論集
 相美伊久雄 2008 「深浦式土器」『総攬 縄文土器』 小林達雄編 アムプロモーション
 水ノ江和同 2012 『九州縄文文化の研究－九州からみた縄文文化の枠組み－』 雄山閣

3 遺物（石器）

遺物の中での石器の取上点数は 4,292 点で、このうち 258 点を実測している。

石鏃は、主要剥離面が残るものも多く、あまり平坦剥離がなされず、仕上げがされていない印象である。剥片

形状により周縁を剥離しながら形を整えただけの石鏃の印象である。石器は、珪質頁岩や石英など遺跡周辺で採取可能で、多様な石材を利用している。また、頁岩の石鏃未製品は、一部に研磨痕のあるものがあり、磨製石鏃の製作を行っていた可能性がある。1492 などは、これらの未製品のドリル転用とも考えられ、必要性に応じた柔軟な利用の実態も垣間みれる。

牧山遺跡の打製石斧に関しては、板倉有大氏の分類(板倉 2009・2015) を参考にしながら、形態と使用痕により包含層出土の打製石斧類をⅠ～Ⅴ類に分類した。

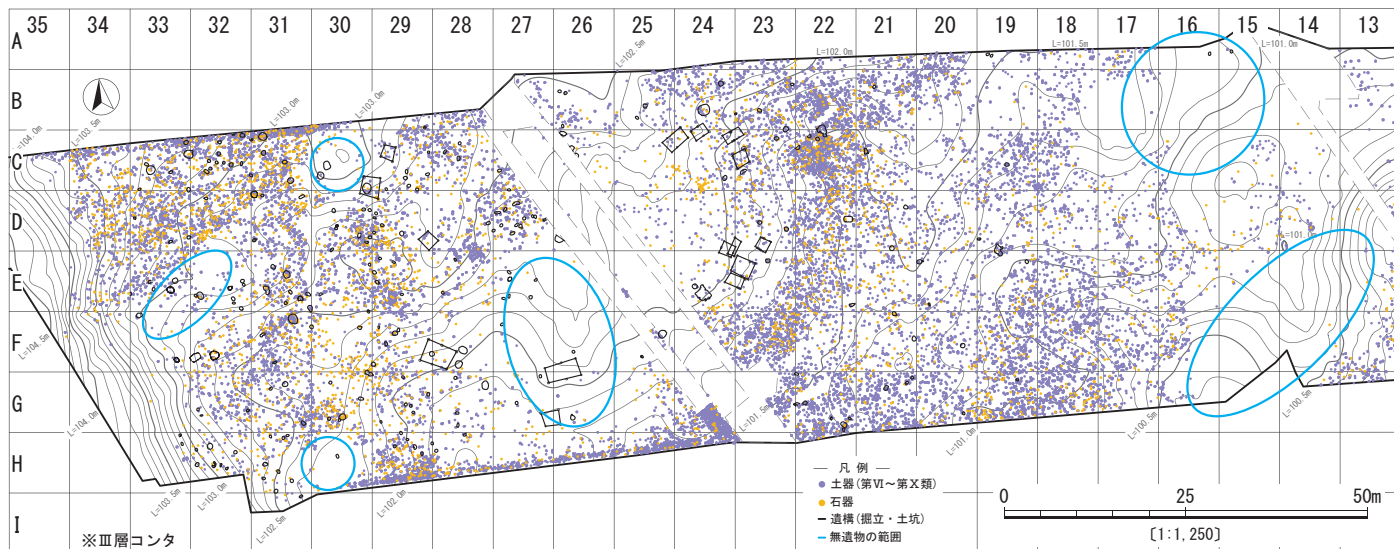
Ⅰ類は基部を細く加工するが、明確な装着痕跡が見られない一群である。手で直接もって使用していた可能性も考えられる。柄の装着が考えられないことから、いわゆる木材を伐採する石斧としての使用は考えにくく、比較的柔らかい土壌などを掘り起こすのに使用していた可能性もある。

Ⅰ類以外のⅡ～Ⅴ類はすべて柄の装着が考えられる。Ⅱ類は基部から刃部までの幅がほぼ同じであり、いわゆる短冊形の形状を呈す一群である。横断面をみると 5 点中 3 点がわずかに湾曲している。また 1554 は刃部正面に線状の使用痕が明確に確認できる。湾曲する形状は土を掘り起こすのに適し、片面の使用痕のみが明確に確認されること、Ⅱ類もまた石斧としての使用よりも土掘り具としての使用が考えられる。

Ⅲ類は幅狭の基部と幅広の刃部をもつ形状を基本と

第 129 表 牧山遺跡石器組成表

器種	安山岩	ホルンフェルス	頁岩	砂岩	凝灰岩	花崗岩	玉髓	チャート	石英	黒曜石	その他				全体数
											水晶	軽石	粘板岩	滑石	
石鏃	4	2	63	0	0	0	8	5	5	15	0	0	0	0	102
石匙	1	3	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
スクレイパー	1	1	3	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8
石錐	0	1	4	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	9
楔形石器	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3
二次加工剥片	0	5	16	2	0	0	1	2	2	4	0	0	0	0	32
使用痕剥片	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
剥片	0	589	614	41	6	1	46	6	81	64	7	0	0	0	1455
チップ	0	63	82	3	0	0	31	9	13	109	1	0	0	0	311
石核	0	1	6	1	0	0	2	0	14	9	0	0	0	0	33
磨製石斧	0	32	13	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	46
打製石斧	0	137	58	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	196
横刃型石器	0	5	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
擦切石器	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
礫器	0	14	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
敲石	15	8	2	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
磨石	100	20	4	15	14	6	1	0	0	0	0	0	0	0	160
磨敲石	739	360	58	239	92	39	0	0	0	0	0	0	0	0	1527
凹石	6	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	9
石皿	57	1	1	7	127	28	0	0	0	0	0	0	0	0	221
台石	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
砥石	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
石冠	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
独鈷石	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
線刻礫	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
ペットストーン	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
垂飾	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
原石	0	0	0	0	0	0	6	1	35	13	0	0	0	0	55
軽石製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	39	0	0	39
その他(研磨石器)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
合計	925	1246	935	329	241	75	100	23	151	218	8	39	1	1	4292



第436図 土器・石器総出土状況図

し、基部が尖るⅢ a類と、基部に抉りをもつⅢ b類に細分している。Ⅲ a類はⅠ類の形状に類似するが、装着痕跡がみられる点で異なり、幅狭にはなるがⅠ類と比較すると、やや幅は広い。5点中3点が湾曲もしくは、わずかに湾曲する形状を呈す。刃部は摩耗してはいるが、鋭利な形状を保ったまま摩耗しており、使用した対象が硬度をもつものとは考えにくく、湾曲するものがみられる点からも、わりと柔らかい土壌などが使用対象であった可能性が考えられる。Ⅲ b類は基部中ほどが抉れ、装着痕が確認できるものである。抉れ部から基部端部にかけて幅が広がるが、刃部よりは幅狭である。1562は湾曲し、刃部背面に縦方向の線条痕が確認できる。

Ⅳ類は刃部が短片（下辺）ではなく、側辺に確認できる一群である。3点中2点が転用品であり、1565は短冊形（Ⅱ類）、1567は磨製石斧の転用品である。1565の刃部は鋭利な形状を保ったままの摩耗が確認できる。板倉氏の述べるようにナタやカマのような使用が考えられる。

Ⅴ類は基部の両側が抉れ、両側辺に刃部をもつ一群である。両側辺が下部で曲線的に合流するため、短辺刃部はもたない。両側辺に刃部をもつが、特に先端部の摩耗が激しく、破損もみられる。先端部が尖る形状や、その摩耗・破損具合から、Ⅴ類は割と硬めの土壌などに突き刺し、土壌を掘り起こすのに用いられた可能性がある。分布域（第437図参照）に関しては、F・G-18・19区と、G・H-28～32区にやや遺物が集中するが、全体的に散在する状況である。打製石斧類等の縄文時代晩期打製石器を製作した時や破損時に生じたと考えられる剥片の分布は16～34区に多く、遺跡の東西部分からの出土は少ない。

以上のように、牧山遺跡の打製石斧類は、明確に木材

の伐採に使用されたと考えられるものではなく、むしろ、土掘りや、ナタ・カマのように草や細い枝などの伐採に使用された可能性がある。木材の伐採には主として磨製石斧の使用が考えられる。

横刃型石器には少なくとも3点の打製石斧類の転用品が確認できた。1589・1590は大きさの差があるが、どちらも打製石斧類Ⅲ類の転用品であり、下辺のみに刃部を作り、上辺は打製石斧時の片側の刃部端部を潰している。この形状は1595・1596等とも共通する形状である。また、上辺の左端部、この石器を保持した時に、ちょうど人差し指があたる部分は摩滅し、光沢をもち、この特徴は1595・1596のほか、牧山遺跡出土の多くの横刃型石器にみられる特徴である。刃部は摩耗しているものが多いが、明確な破損品は出土していない。横刃型石器の使用対象物が、破損を招くような硬度のものではないと考えられる。その他の石器とした中に、2点の磨製石器があるが、どちらも横刃型石器の用途に近い使われ方をしたと考えられる。

全体を俯瞰すると、石鏃は、B・C地点に分布が集中し、B地点は石材別（頁岩8、石英、頁岩1）にまとまりがみられる（第342・345・348～350図）。また、C～E-27～31区には未製品かつ破損品の石鏃の分布域が重なり、石器製作の場所であった可能性がある。磨製石は石器の中で最も多く出土しており、石材別では安山岩製が最も多く、ホルンフェルス、砂岩と続く。B地点に2か所、C地点に1か所まとまりがみられ、これは石皿の分布域とも重なる。石鏃・石匙・楔形石器・スクレイパー類などの狩猟具が出土し、磨・敲石や石皿など植物質食料の加工具・調理具も多い。また磨製石斧も一定量あり、伐採や木材加工もうかがわれる。そして、打製石斧・横刃形石器・石包丁状石器は栽培活動を行って

たことが想定される。

第436図から分かるように、石器がほとんど分布していないブロックがB・C地点で6か所確認できる。これは土器にも同じことが当てはまる。空白の場所が生じたのは、生業活動の空白域であったり、たまたま微地形のため遺物が残らなかったとも考えられるが、これらの場所が堅果類等の植生の分布域・採集場所、あるいは畑であった可能性も考えられる。しかし、第436図の石器に関しては全石器分布図であることから縄文時代前期・中期や弥生時代以降の石器も含まれている可能性があり、また土器に関しては西平式系土器の全分布図であり、各型式毎の時期でみると遺物の空白域はさらに広がる。

参考文献

板倉有大 2009 「九州南部縄文時代後・晩期打製石斧類の器種分類」, 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会編『南の縄文・地域文化論考(南九州縄文通信 No. 20) 上巻』, pp. 195-204

板倉有大 2015 「石器から見た九州晩期農耕論の課題」『第25会九州縄文研究会福岡大会「九州縄文晩期の農耕問題を考える」発表要旨・資料集』, pp. 24-33, 九州縄文研究会

石冠(第383・438・439図)

牧山遺跡の石冠は、掘立柱建物跡が環状に配置され、土器や石器の出土が極端に少ない内側から出土している。以下、環状の内側を「中央部」と称して述べる。石冠は「中央部」の中心付近からの出土ではなく、やや東寄りの位置から出土している。また、刃部状の頭部が若干下向き状態で出土し、また極端に遺物の出土量が少ない「中央部」から出土した。精神文化に深く関係する遺物である可能性が高い。

そもそも石冠とは、「球頭状あるいは石棒状」のものについて「男子の生殖器具全体を模して造られたもの」(谷川1923:512)、あるいは「男性の象徴と女性の象徴とが結合したもの」(能登1981:126)と解釈する立場がある。一方、石冠は石剣の柄を折り取ったものに由来し、去勢の表現(西脇2007)と解釈する立場もある。

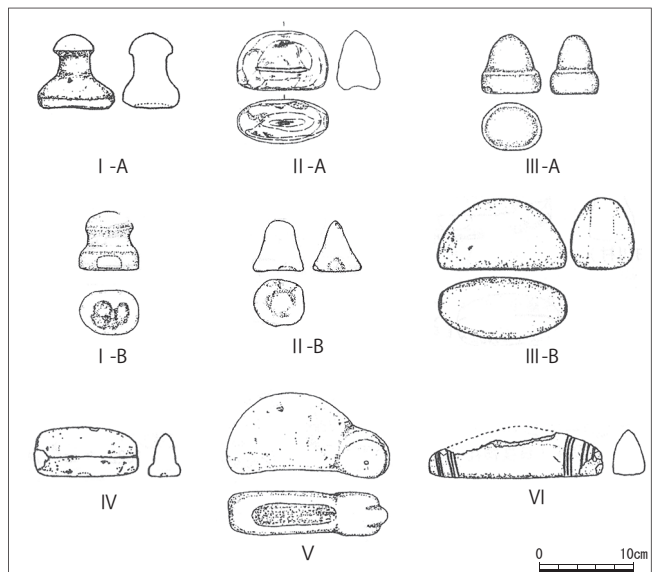
県内での石冠の出土例は少ない。干迫遺跡、柘原貝塚、本遺跡の3例である。柘原貝塚の石冠は完形ではないが、本遺跡の石冠の形状に近く、三角擗形石製品の可能性も考えられる。一方、干迫遺跡出土の石冠は完形品で、石材は頁岩6である。頭部は丁寧に調整・研磨され、刃部状に加工されているが、一部欠損する。頭部側面付近は横方向を主体に丁寧に研磨され、側面中央部は斜め、もしくは縦方向に研磨されている。石材の違いが考えられるが、本遺跡のものとは比べ、研磨による線状痕は不明瞭である。底部は安定性があるものの、完全な平坦面ではない。方向によっては底面の中央部がすこし凹みをもつようにも見える。また、底面の中央部に研磨が集中して

みられ凹みを意識して作られた石冠の可能性も考えられる。ハマグリ型で、本遺跡の石冠と形状・大きさ・石材等共通点が多い。

九州では石冠の出土例は少なく、宮崎県と福岡県で石冠の出土例がある。宮崎県は宮ノ東遺跡と野首第2遺跡の2遺跡である。類石冠として報告されている宮ノ東遺跡の石冠4点のうち1点が形状等類似しているが、時期不明遺物である。しかし、平面分布状況を見ると縄文後期(磨消縄文系の土器も出土している)の遺物集中範囲と重なるため後期の可能性も考えられる。野首第2遺跡は2点石冠状石製品として縄文時代後・晩期に推定されると報告されている。どちらも橙黄白色の凝灰岩製のほぼ完形で、全面に研磨による線状痕が残っている。1点は底面に凹みをもつ。一方、福岡県の西小路遺跡からも1点、石冠が出土している。住居内から石棒と伴に出土し、時期は御領式土器前後と考えられている。形状は、本遺跡の石冠とは異なり、底面は平坦で胴部がゆるやかに凹み、頭部は球頭状ではなく平坦である。

一方、岐阜県は石冠の出土例が特に多く、石川県、愛知県、福井県と続く(第130表)。中でも岐阜県の飛騨地方が一番多い。大石崇史氏は総数440点あまりを集成し、石冠を1~7類に分類している(第438図、大石・吉朝2010)。図中のAとBは、基底部との区別が明瞭なものをA、一体化したものをBとしてある。

- I類 球頭状。頭部は石棒状や底面に凹みをもつものがある。
- II類 斧状で、頭部が刃部状をなす。基底部との区別が明瞭なタイプと一体化したタイプに分けられ、底面に凹みをもつものもある。石棒状の頭部を有しているものもあり、男女両性を有した性象徴



第438図 石冠分類図(引用:大石・吉朝2010一部改変)

の儀器として完成された型式と考えられる。

Ⅲ類 山形状で、正面観も側面観もゆるやかな山形をなす。頭部、基底部の有無でも分けられる。底面に摩滅痕があるものは少なく、磨石的機能は見出せない。

Ⅳ類 長い刃部と安定性のない基底部でⅡ型を横長化したもの。

Ⅴ類 哺乳類などの動物模倣に始まる石冠類型。

Ⅵ類 魚型で豊漁祈願。

Ⅶ類 特殊な形態。

飛騨地方出土の石冠と比較すると、本遺跡の石冠はⅡ類の基底部と頭部が一体化したものに属すると考えられ、飛騨地方同様、底面に凹みをもたないという共通点がある。

石冠以外では、川添氏が佐八藤波遺跡（三重県伊勢市）から出土した岩偶の形態的特徴が南九州の軽石製の岩偶に極めて類似するとし、両地域の関係性について述べている（川添 2010）。小林氏（奈良大学）はこの両地域の関係が石冠においても可能性が考えられるとし、興味深いと述べている。なお、同種の岩偶は日本海沿岸に近い近畿の桑飼下遺跡（京都府）からも出土しており、南九州と伊勢湾岸や北陸との関係が考えられる中、牧山遺跡からは北陸系の石冠が出土しており、南九州と中部東海地方との関係があったことがよりいっそう強くなったとも述べている。

第 130 表 各都府県の石冠出土数

都府県	岐阜 (美濃)	岐阜 (飛騨)	石川	福井	愛知	奈良
石冠出土数	54	447	228	9	63+ α	5

都府県	大阪	京都	三重	兵庫	滋賀
石冠出土数	6	2	6	4	4

現在のところ、中国地方から石冠の出土例がないため、縄文時代後期、中国地方などを通る陸路ではなく、伊勢湾岸から南九州へと海路で伝わってきた可能性も考えられる。今後、多くの石冠の出土例を期待したい。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997 「干迫遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22

宮川村教育委員会 埋蔵文化財調査室 1997 「岐阜県吉城郡宮川村 家ノ下遺跡」 岐阜県宮川村教育委員会発掘調査報告書

垂水市教育委員会 1999 「終原貝塚」 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 4

久留米市教育委員会教育文化部文化財保護課 2004 「平成 15 年度 久留米市内遺跡群」 久留米市文化財調査報告書 199

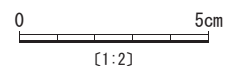
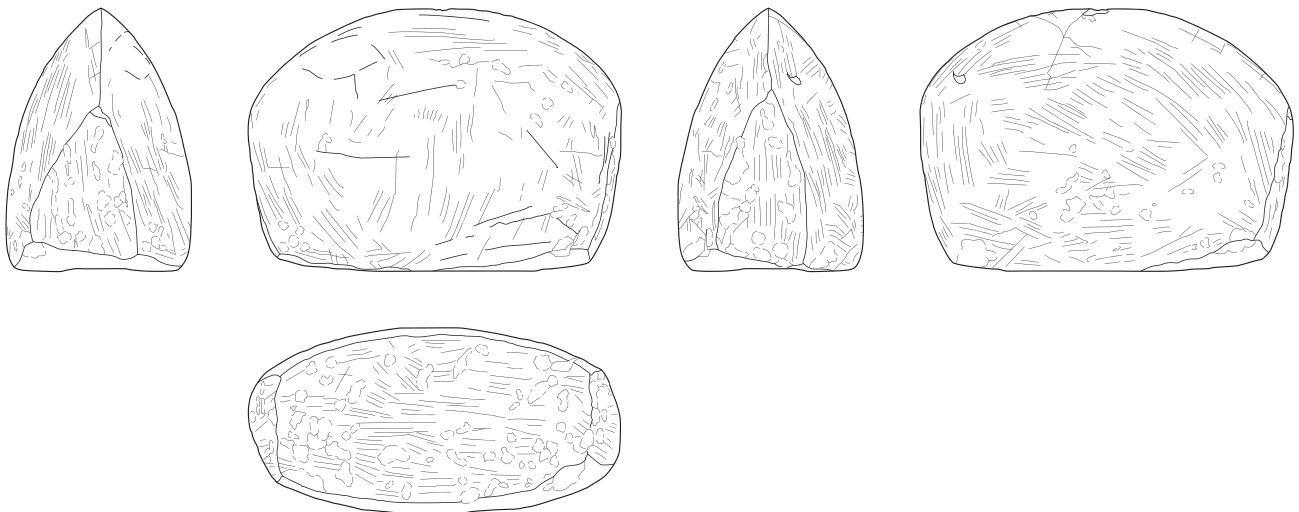
宮崎県埋蔵文化財センター 2007 「野首第 2 遺跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 158

西脇対名夫，小杉康，谷口康浩，西田泰民，水ノ江和同，矢野健一 編 2007 「石冠とその類品」 心と信仰：宗教的観念と社会秩序 同成社

宮崎県埋蔵文化財センター 2008 「宮ノ東遺跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 173

大石崇史・吉朝則富 2010 「岐阜県」 縄文時代の精神文化 第 11 回研究会発表要旨集・資料集 関西縄文文化研究会

川添和暁 2010 「縄文後晩期の岩偶岩版類について-東海地域の事例を中心に」 愛知県埋蔵文化財センター研究紀要 (11)



第 439 図 干迫遺跡出土石冠

第3節 弥生時代以降

1 遺構

土坑はB地点のⅡa層から2基検出されている。1号土坑からは、成川（東原）式土器の土器片が出土したことから、この土坑は古墳時代中期に該当すると考えられる。2号土坑は遺物の出土もなく、埋土状況、遺構形成からも時代を特定し難く、時期不明とした。いずれの土坑も検出面から10cmと浅く、土坑の用途も不明である。

炭化物集中部はB-7区、Ⅱb層より炭化物が集中して出土した。検出状況から10cmを超えるような大きな炭化材はなく、材の加工の有無も分からない。いずれも小片の炭化木で、どのような過程で形成されたかも不明である。放射性炭素年代測定（AMS法）と樹種同定を行ったところ、2σ値で1178～1008（cal BP）、9～10世紀代という値が得られ、樹種はクヌギ節という結果が得られた。

Ⅱ層上面において古道跡7条と溝状遺構1条を検出した。硬化面を伴うもの、連続する楕円形の凹み（波板状凹凸）を伴うもの、硬化面を形成しないものがあり、同じ条件下で形成されたものかどうかは不明である。古道跡3号の南西側には、幅20cm程度の楕円形の硬化面が連続して検出された。これらの硬化面及び波板状の凹凸は牛馬の歩行にともない形成されたものとも考えられている（東2003）。古道跡2号と3号はおおよそA-22区で、約100度の角度で交わるように検出されており、調査区南側を区切る古道跡として区画を形成しているようにもみえる。

2 遺物（土器）

弥生時代の土器として甕形土器32点、壺形土器22点を掲載した。これらの土器は、弥生時代中期に位置付けられ、入来式、山ノ口式土器に比定される。B～D地点においては、B地点を中心に遺物が出土し、C・D地点からの出土がほとんどないことから、B地点が弥生時代中期の活動の中心地であったと考えられる。ただ、牧山1で報告済みであるA地点からは、山ノ口Ⅱ式、高付式と比定される土器が多数出土しており、竪穴建物跡3軒、掘立柱建物跡4棟も検出されていることから、弥生時代中期以降、活動の中心がB地点からA地点に移動したと推測される。

古墳時代の土器は、先述したとおり土坑1号より、成川（東原）式土器と思われるものが2点出土した。包含層出土土器は、甕形土器15点、高坏形土器4点、埴形土器1点を掲載した。1691・1692は稜が緩やかで、口縁部はS字状に外反することから、成川（東原）式土器と考えられる。

古代から近世の遺物は、Ⅱa層より出土した青磁3点、白磁2点、染付1点、薩摩焼9点、鉄製品2点を図化した。いずれも生活雑器として使用されたものと思われる。

第4節 遺跡について

牧山遺跡では、縄文時代前期から中期にかけて土器は希薄で、後期前半は全くみられない。後期の市来式土器から忽然として利用されはじめ、西平式系土器前後の土器型式の時期に遺構を形成する。掘立柱建物跡の出現も同時期と考えられ、環状に配置されている。また、環状の内側から石冠が出土したことや、埋納遺構の検出から祭司的な場の可能性もある。

縄文時代早期では遠隔地の石材が使われ、石材が選択的、集中的に使われているが、縄文時代後期は遺跡周辺で採取可能な石材を使用し、剥片形状に合わせて石器を作っている。交易圏は存在すると思われる。コンパクトな「縄張り」があり、その域圏で石材やら自然利用を行っている状況が反映されている。また、石器組成と圧痕分析によるアズキやコクゾウムシなどの痕跡や、土器付着炭化物の炭素・窒素同位体比分析による淡水魚類の摂食など考え合わせると、網羅的な食糧獲得体系がうかがわれる。

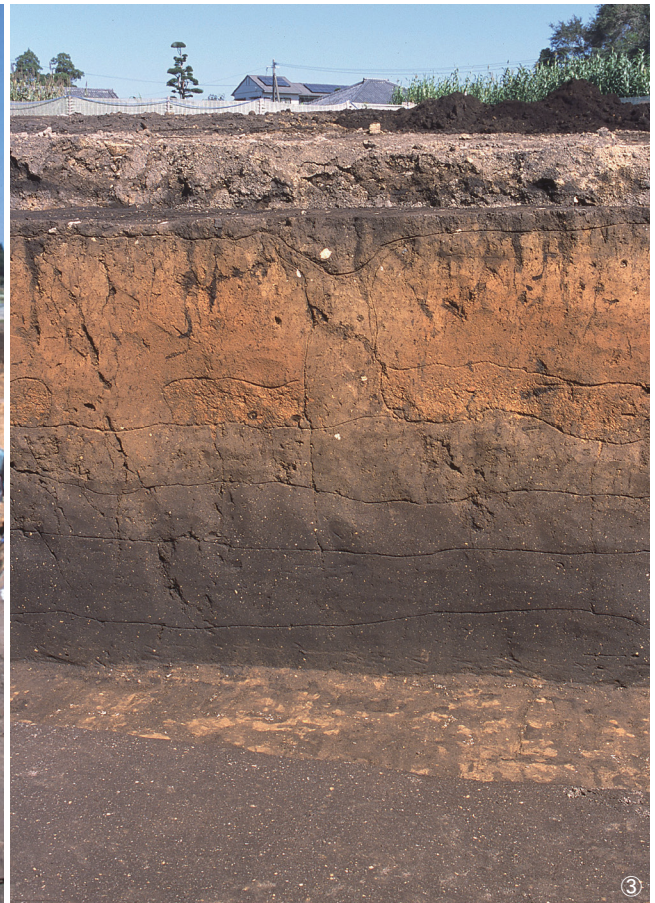
弥生時代中期は、竪穴建物跡1・2号が検出された所より北側の、串良川にいたるまでの平坦地に集落が広がっていた可能性がある。また、国内産の銅鑿が出土したことから、生産地と思われる北部九州など他地域との交流があったことをうかがい知ることができる。

引用・参考文献

- 中園 聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」 人類研究9
- 東 和幸 2003 「波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論」『縄文の森から』 創刊号鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 内村憲和 2015 「大隅地域の弥生時代中期後半から後期前半の土器編年について」『鹿児島考古』45号 鹿児島考古学会
- 川口雅之 2019 「薩摩半島南部西海岸における弥生時代前半期の編年」『鹿児島考古』49号 鹿児島考古学会

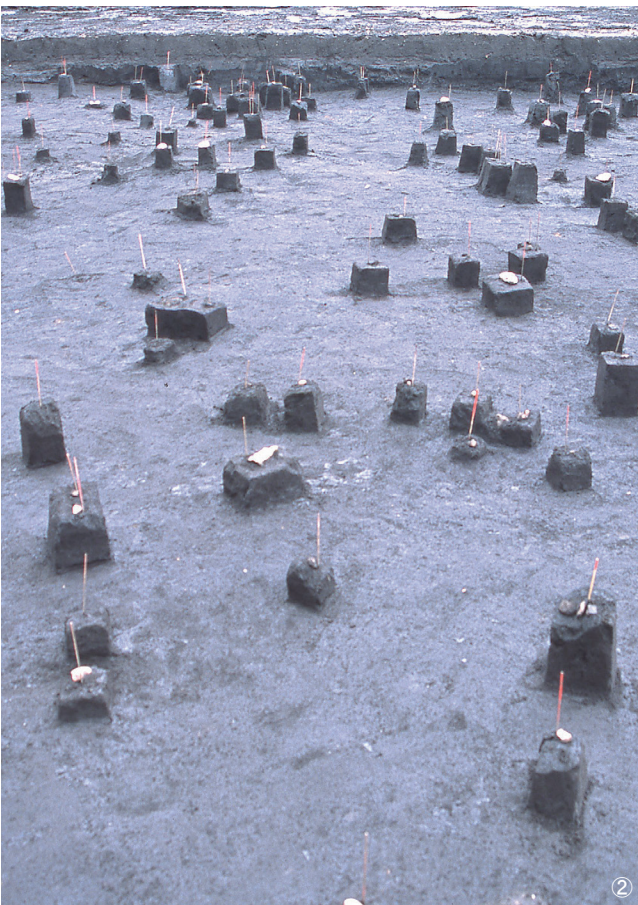
写真図版

図版1 牧山遺跡全景・発掘作業風景・土層断面



①牧山遺跡全景 ②発掘作業風景 ③土層断面（E-12～17区）

図版2 遺物出土状況



①E・F-19・20区Ⅱa層遺物出土状況 ②E-20区Ⅱa層遺物出土状況
③A・B-6～13区Ⅱb層遺物出土状況



①検出状況 ②半裁状況 ③完掘状況

図版4 掘立柱建物跡1

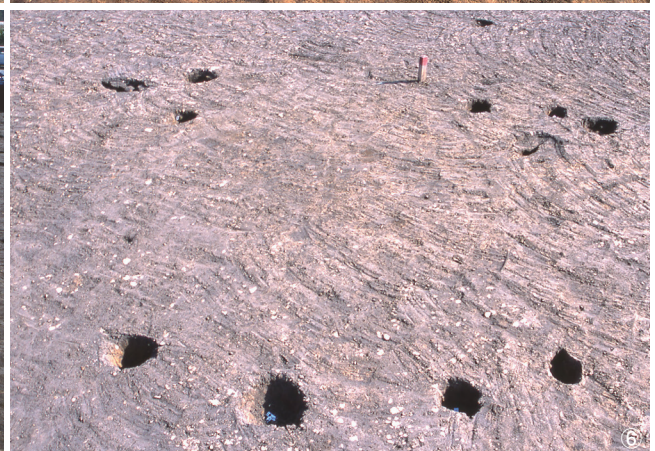
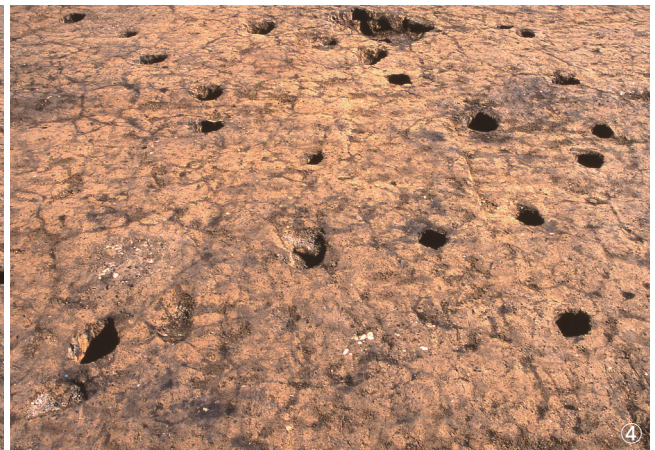
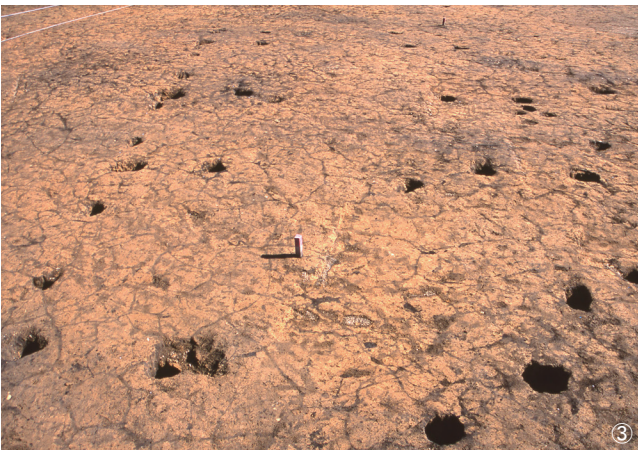


①掘立柱建物跡1号完掘状況 ②掘立柱建物跡2号完掘状況 ③掘立柱建物跡3号半掘状況
④掘立柱建物跡4号検出状況 ⑤掘立柱建物跡5号半掘状況 ⑥掘立柱建物跡6号完掘状況

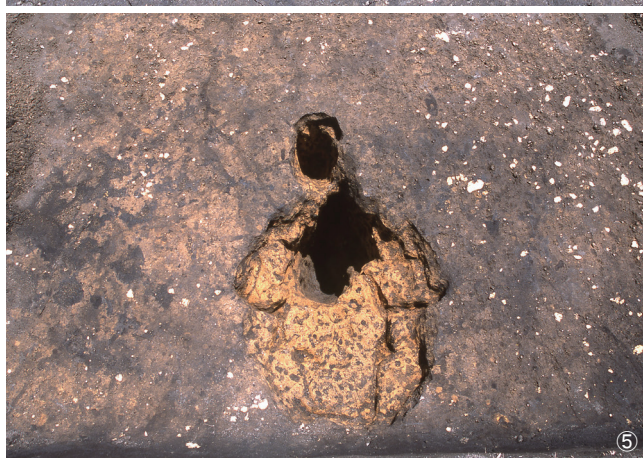


①掘立柱建物跡7号半掘状況 ②掘立柱建物跡8号半掘状況 ③掘立柱建物跡10号検出状況
④掘立柱建物跡9号半掘状況 ⑤掘立柱建物跡11号完掘状況 ⑥掘立柱建物跡12号半掘状況

図版 6 掘立柱建物跡 3



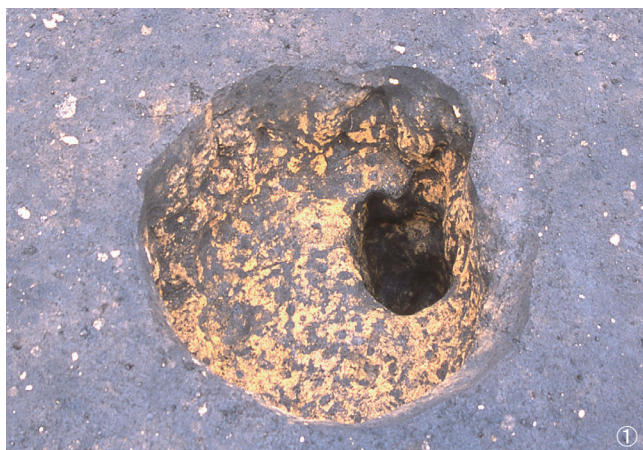
①掘立柱建物跡 13号完掘状況 ②掘立柱建物跡 14号完掘状況 ③掘立柱建物跡 15号完掘状況 ④掘立柱建物跡 16号完掘状況
 ⑤掘立柱建物跡 17・18号完掘状況 ⑥掘立柱建物跡 19号完掘状況 ⑦掘立柱建物跡 20号完掘状況 ⑧掘立柱建物跡 21号検出状況



①貯藏穴1号埋土状況 ②貯藏穴1号完掘状況 ③土坑1号完掘状況 ④土坑2号完掘状況
⑤土坑3号完掘状況 ⑥土坑4号完掘状況 ⑦土坑5号遺物出土状況 ⑧土坑6号遺物出土状況



①土坑 7 号半掘状况 ②土坑 7 号完掘状况 ③土坑 8 号完掘状况 ④土坑 9 号完掘状况
⑤土坑 10 号完掘状况 ⑥土坑 11 号完掘状况 ⑦土坑 12 号半掘状况 ⑧土坑 12 号完掘状况



①土坑 13 号完掘状况

②土坑 14 号半掘状况

③土坑 15 号半掘状况

④土坑 16 号遗物出土状况

⑤土坑 20 号遗物出土状况

⑥土坑 21 号遗物出土状况

⑦土坑 22·23 号完掘状况



①土坑 22 号遗物出土状况 ②土坑 24 号完掘状况 ③土坑 25 号半掘状况 ④土坑 25 号完掘状况
⑤土坑 26 号遗物出土状况 ⑥土坑 26 号完掘状况 ⑦土坑 28 号遗物出土状况 ⑧土坑 30 号完掘状况